

村瀬 正紘

1. 事業実施の目的

博士論文執筆に向けた考古学研究のための予備的実地調査

2. 実施場所

ペルー共和国ティンゴマリア市・ワルメイ市

3. 実施期日

2024 年 7 月 4 日（木）～ 2024 年 10 月 3 日（木）

4. 成果報告

●事業の概要

今回の学生派遣事業による調査ではペルー共和国内の 3 つの場所において発掘調査と踏査を行った。具体的には、ワヌコ県ティンゴマリア市にあるクエバ・デ・ラス・ピラミデス遺跡とアンカシュ県ワルメイ市にあるプラヤ・クレブラス遺跡において日本の研究者が実施する発掘調査に同行した。その後、日本学術振興会科学研究費助成事業による調査を挟んだ上で帰国している。

クエバ・デ・ラス・ピラミデス遺跡とプラヤ・クレブラス遺跡の発掘調査へは、博士論文の執筆に向けた考古学的調査研究の実践的な手法を習得する目的で同行させていただいた。最初に調査に参加したクエバ・デ・ラス・ピラミデス遺跡は、セルバと呼ばれるアマゾン地方の密林地帯の西の端に位置する洞窟遺跡であり、洞窟内に生息するコウモリや鳥類のフンが分解され堆積した地層が複雑に重なる場所である。今回のクエバ・デ・ラス・ピラミデス遺跡の発掘調査の目的は、遺跡で出土する遺物の発掘・分析を通じてアマゾン地域の土器および石器の編年を構築することであった。調査では遺跡の内部に 2 つのトレンチ (2×12m、2×2m) が設定され、層位ごとにフォトグラメトリ処理のための記録を取りながら発掘が行われた。約 1 ヶ月の行程を通じ、最終的には先土器時代の地層まで発掘が進んだ。筆者は調査において主に 2×12m のトレンチにおける発掘作業を担当し、現場監督の指導のもと発掘を行った。

次に調査したプラヤ・クレブラス遺跡はアンデス文明形成期早期の基壇状建築が見られる太平洋岸の遺跡であり、今回の調査ではその遺跡の主要部である基壇状建築と、それに隣接する広場のプランを明らかにすることが目的であった。調査では、2m 四方のグリッドからなる発掘区域が基壇状建築と広場をカバーするように設定され、その時々出土状況に応じて発掘するグリッドを切り替えながら、調査が進められた。約 1 ヶ月の行程を通じ、基壇状建築の外壁の詳細な位置が確認され、基壇状建築と広場の利用時期が複数のフェーズに分かれていたことが明らかとなった。筆者は調査日程の前半において発掘作業を担当し、後半においてペルー人による発掘作業への指示を担当した。

2つの発掘調査に参加した後、日本学術振興会科学研究費助成事業によるワヌコ市での調査を挟んで、ペルーにおける研究者及び調査協力者とのあいだで緊密な情報交換体制の構築を図り、また調査結果のデータ整理を進めたうえで、帰国している。

●本事業の実施によって得られた成果

クエバ・デ・ラス・ピラミデス遺跡とプラヤ・クレブラス遺跡の調査では、発掘調査の技法を実践的に学ぶことが出来た。この2つの遺跡は地理的環境の全く異なる場所にあり、それぞれの調査プロジェクトの目的も異なるものであった。クエバ・デ・ラス・ピラミデス遺跡は複雑に層位が重なる洞窟遺跡であり、発掘が難しい現場であったが、限られた調査期間の中でどのようにプロジェクトを進行すれば調査目的を達成することができるのかを学ぶことが出来た。プラヤ・クレブラス遺跡の発掘調査では、期間の後半においてペルー人の作業員に指示を出す役割を担当した。層位と遺物の記録・管理を同時に行いつつ、作業員に指示を出すことは、来年以降自らの発掘プロジェクトを遂行しようとする筆者にとって非常に貴重な調査手法習得の機会となった。

2つの調査を通じて調査地域や調査方法について具体的な方針を立てるための情報が得られたのは非常に大きな成果であったと言える。また、考古学研究者との調査を進める中で、彼らとの協力関係を築くための素地を作ることが出来た。これは今後調査を進めていく上で重要であり、彼らとは引き続き調査地域についての情報共有を行なっていく予定である。

●本事業について

海外をフィールドとする文化人類学・考古学の研究を行う本学の学生にとって、本事業は貴重な学生支援制度の一つである。本事業の存在は、人類文化研究コースで学ぶことの大きなメリットであり、今後も継続的に実施されることを望んでおります。